
映画『天空の難破船』 ちょっぴりその後

琴李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

映画『天空の難破船』 ちよつぴりその後

【Nコード】

N8028X

【作者名】

琴李

【あらすじ】

快斗は大阪で無事にレディ・スカイを手に入れた。けれど、その時東都で待っていた青子は、その距離ゆえにウイルスの事実を知らなくて……。

青子がキッドの正体知らないバージョン。

2010年の映画公開時、見た興奮そのままに書いたものです。

ゼロまでの距離 大阪（快斗/キッド）

夜の帳が降りた世界が闇に包まれ始める中で、幾千の星のように光の瞬く摩天楼は、それを司る人々だけを消してしまったために限りなく静かだった。

そんな街のビルの合間を、幻想的光景にまるでそぐわない白い鳥が一羽横切った。そう飛んでいる、ではなくまさにその表現がふさわしい。

あっちへゆらゆらこっちへふらふら

そんなあまりにも不安定な真つ白な翼を持った彼の姿を、下から見あげるものがもしも今の大阪に居たら、恐らく一様に驚くだろう。彼にとって幸いだっただのは、現在静か過ぎるこの町には、だだっ広い横断歩道を猫が歩いて渡れるほどに人っ子一人いなかったことだ。この飛行を誰かに見られていたら、怪盗紳士の代名詞が二、三個外れてしまつかもしれなかったので、非常にありがたかった。そう思う余裕程度はあった。

……ソレが限界だった。手で動かすものは何でも、その操縦士の心情を反映するものであり、事実彼は今、本当にハングライダーと同じくらいに不安定であった。と同時に、彼の左手はかなりの痛みを訴えているので操縦はかなり困難だった。なにしろ空手の有段者かつ関東大会優勝者だ。最期まで華奢な女性と違って侮ってはいけなかったのである。

「……たたく……参ったぜ……」

それ自体は、今は小さな名探偵の、その幼馴染だと言い張る可憐な恋人の、純粹な気持ちからの追跡をかいくぐるためには仕方ない行為だった。動機も含めて全てが真つ白だと言いきれる。なんせ違つと分かせてかつ嫌われる必要があつたのだから。多少理想的な紳士の行動から外れていても仕方がないのだ。

「やべえ、よ、なあ……」

本当に問題があつたのは、その彼女の見かけだった。自分と名探偵の本来の姿が、当人達でも驚くほど似ているように、自分の幼馴染と彼の少女もまた、雰囲気の違いこそあれど大変良く似ていた。

それはダイレクトに彼の心臓を刺激し脳を伝つて、彼女から離れた現在も手の動きに率直に現れているということなのである。ポーカーフェイスがいくら上手くても、無意味なくらいにはつきりとついでに局部的な痛みもはつきりと……。

「……どうすつかない」

彼だつて夜のクールな怪盗紳士の仮面を脱ぎ取れば、一介の高校生な訳で、その感覚をなかつたことにするというのはどうにもこうにも無理があつた。なによりも疑似体験より現実に近いのである。

結果怪盗キッドではなくて、一人の男子黒羽快斗として、彼が求めていたものをむき出しにさせられたということ認めざるを得ない。普段、無意識に保つべき距離として押さえ込んでいても、何の意味もないくらいに。

行為の副産物として明日から同じ距離を保つていけるのか急に自信がなくなつてしまったのだ。離れて随分経つた今でもあの細さと感覚がくつきりと彼の腕に残つていて、なかつたことには到底出来そうにないのだ。今にも腕が勝手に動いて華奢でやわらかいはずの彼女を抱きしめてしまいそうになるという末期的症状まで出る始末。そうしたいと体は痛切に訴える。それを理性ではがいじめにして押さえつけ記憶の段階から抹消していく。延々とその繰り返しだった。操縦も不安定になろうというものである。

父の名を受け継ぐものとして、マジシャンとして、常にポーカーフェイスを浮かべる余裕は持ち合わせているつもりだった。まさか、たった一人の少女に、外からではなく内側から追い詰められているなんて、紳士が聞いて呆れる事態が訪れようとは、いや、訪れるとは分かってはいたが、こんな自分でも全く考えも付かなかった形であるとは。いや、やはり考えが甘かったと反省するべき点はあるにしても……。

華やかな表舞台から一転、裏舞台での出口のない反省かつ苦悶はいつまでも続くかに思われた。

ピルルルルルルル……

「おっおわっ」

考えに沈んでいても飛行をやめるわけにはいかず、相変わらずおぼつかない運転をしていた快斗（既に怪盗キッドではない）は、無理矢理現実に戻され、無機質な音の出所である胸元を条件反射で押さえた。

しかし、いくら運動神経抜群でも今の彼に両手でも無理なことを片手でできるはずがない。

「わっわっ」

丁度吹いてきた風に大きくあおられバランスを崩し、高い電子音と共に、快斗は普段からは考えられないほど無様に急降下していった。体勢を立て直そうにも手がグライダーに届かない。無理に伸ばそうとすると筋が痛んだ。これは相当に手加減がなかったな、などと感心している場合ではない。地面まではまだ距離があるにしてもこの体勢はまずい。

「ちよっストップストップ!!」

今日の昼間、いきなり空に放り出された見た目小学生の少年を空中でつかまえるという離れ業を成したはずの快斗は今現在、そのク

ールさのかけらもなく無意味に叫びながら、流れ星よろしくどんどん地上に近づいていた。

白い衣装を着ているので、それは夜空に非常に映えており、淡い月明かりに照らされて、適度な距離をとるならばそれと見間違えても全くおかしくはないだろう。しかし、現在落ちているのはチリではなくて、真正正銘生身の人間なのである。軌跡のように見えるのは、彼の代名詞ともいえる白い翼だ。

「まてまてまてまて!!」

なんとか体勢を立て直そうとするが、既にハングライダーは風に奪われあらぬ方向へとあおられ続けていてもうどうにもできそうにない。

ただ目を見開いて涙まじりに叫びながらひたすら落ちていく快斗。繰り返すが、大阪の町にまだ人っ子一人居ないことがせめてもの救いだった。逆に当然、待つものもない。今日は単独行動なので、寺井が落下地点にエアバッグなどという都合のいい道具を設置してくれてもいない。たとえいたとしても、1分にも満たない時間では事実上不可能だろうが。

「つてえー……」

結局快斗が突っ込んだのは、どこかの公園の大木の上だった。一応あれほど慌てふためきながらも公園までは何とか軌道修正してたどり着けたのだ。しかし、落下地点までは正確に選べなかった。まさに幸いな場所だったといえるだろう。かなり勢いをつけて落下したにも拘わらず生きているのはそのおかげだ。代償として小さい切り傷等はそこかしこに出来たらしいので実際の痛みは相当だったがそこは文句も言えない。

まあこれぐらいで死ぬなら、怪盗の看板降ろさねーとなど、すっかり安定した精神状態でやりと笑みをこぼしながら胸のうちで咳く余裕が実際彼にはあるのだ。

そこで思い出したように快斗は、今だ微かにライトを光らせなが

ら震えて鳴り続ける携帯を、無造作に手に取った。白い衣装の胸元の背広の裏に入れていたので、逆さ吊りに近い格好になっても落ちなかったようだ。今更だがこれが全ての発端であるウェイターに化けていた際に取りられたそれを白い袋の中から奪い返し、念のために履歴を確認した時に電源をそのままにしておいたことが仇になった。あの時彼にはそんな小さなことをかまっている余裕もなかったのだ。それでも今は怪盗ではない。こちらの状況など知るはずのない相手と話すため、彼は軽い咳払いをする。声を目の前の楽しみを邪魔された不機嫌なものに装うために。もっとも今回はそれは大して難しいことではなかったが。

「……もしもし？」

「快斗！！ もうっやっとながった！ 今何処に居るのよ！！」
突然聞こえてきたものすごい大声に、快斗は思わず携帯電話を耳から遠ざける。しかし、そうしても声はまるですぐ側に立って叫ばれている様に鮮明に聞こえた。

しかし、目下彼の関心事とはなぜ彼女がわざわざ連絡をよこしたのだろうかということだ。しかもこんなに慌てて。いやこれはむしろ……

「あ……おこ？」

「他に誰が居るのよ！？ 快斗は今日一日全然電話に出ないし、何処にいて何してるのかも全然教えてくれないし！！」

怒声に嗚咽が混じっているように聞こえるのはたぶん気のせいではないだろう。快斗は自分の胸を鷲掴みにされたような気がした。それでもそれを無理やりに隠す。訳が分かっていないお茶らけた幼馴染を装って。

「あーっ？ オレは今日、鈴木財閥のベル・ツリーI世号を見に行くなって言っただろうが！ キッドもついでに見てくるって」

「知ってたよ！ けどねっ大阪は大変だったんじゃないの!？」

彼女の言うことを理解するのに数秒の時間が掛かった。

実際彼にとつてそれは既に終わったことだったのだ。海外旅行帰国者の眠そうな瞳を間近で見せ付けられたときのように快斗は戸惑っていた。それは紛れもなく『時差』だった。たった数時間であっても紛れもなく。

「……あーっ……そうだな」

「そうだなって何よ！ 青子とつてもとつても心配だったんだから。普段は東京に居るはずの快斗がキッドを見に行ったせいでもしも感染してたらって思ったら気が気じゃなかった。それにも快斗が死んでたら青子たち一生会えなくなっちゃってたんだよ！ ！！ 分かってるの！！」

キンキンキン……青子の声は大きな上に普段は心地よいはずのソプラノは今は異様に甲高く、快斗の耳とついでに胸をぐさりぐさりと容赦なく突き刺していく。彼女の言葉の意味を想像した途端に体中の痛みすら消え失せて、出す息が柄にもなく震えていた。だから彼女の呼吸が整った頃にたった一言かろうじて声にするのが精一杯だった。

「……ああ……」

『ほんとに？ほんとに分かっているの快斗？ 青子だけじゃないんだよ！ 恵子や紅子ちゃんや、白馬君にも会えなくなってたんだよ！ 勿論快斗のおば様にもお父さんにも！！』

言い募る青子の苦しそうな口を今すぐにもふさぎたかった。

例のあの赤いシャムネコ達の目的は奈良の仏像で、ウイルスはそのための陽動作戦としての偽騒動だったとはいえ、離れて情報が伝わりにくい東京でたったひとりで待つ彼女が、その騒動がまだ真実として機能している間にどれほどに恐怖と戦っていたか。目に浮びすぎて怖い。

「分かっている……分かっているよ……んなこと言われなくなつて……だから落ち着け」

普段の軽口を封印し、出来るだけ真摯に、青子の前では決して見

せない紳士たる『彼』の口調にほんのわずか似せて告げる。言うまでもなくそれは演技ではなく彼の本心であり、同時に願いだった。

『……ほんとに感染の可能性、ないの？』

彼に感化されたのか急に小さくなった声に、快斗はできるだけ安心させるように慎重に言葉を選ぶ。

本当のことはどうしても伝えられないから。

「ああ……なんにしるオレは一介の見物人だし……飛行船に乗った奴等なら可能性としてはあるかもしれないけど……警察は違うって発表してんだからそうなんだろ……一般市民が感染する可能性が1%でも残ってるなら、飛行船は着地したりしねーよ」

『……うん……そ、だね』

「とにかく、電車復旧したらそっちに帰るから。警部はまだなんだろう？」

『うん……あんな事件も起こっちゃったし、今日は泊まりで事情聴取だっさつき連絡があった』

体の力が一気に抜けた。安心からつい口を付いて出てきてしまった言葉。

「おいおい……その時に確かめなかったのかよ……大阪の状況」

言うてからすぐに、まずいと思った。しかし出てしまった言葉は戻らない。それがいくら日本海溝よりも深い後悔を伴っているとしても。

青子の時が止まったのが、電話越しにもはつきりと感じられた。しかし身構える余裕はなかった。あるのなら、後悔などしない。

『バ快斗！ もう知らない！ もう絶対絶対心配なんかしてあげないから！！ 大っ嫌い！！』

「おっおいつ」

っーっーっー

数秒前まで遠く離れた幼馴染の声を届けていた命を持った機械は、現在通話を始める前よりもよほど無神経で、無気力で無機質な音を無遠慮に流すのみ。

「まずった……」

呆然と通話の金額と時間を示している青白い画面を見つめながら、快斗は今更ながらに呟く。だがやがて諦めたように画面を閉じた。そのまま顔を上げて若干傷の付いた顔で空を見つめる。

どんなに怪盗をやっても、やっているからこそ、どうしようもないお調子者の、それでもまちがはなく素の自分である高校生の黒羽快斗は、結局いつもいつも彼女を困らせてばかりだ。加えて今回は泣かせてしまった。しかも快斗としては絶対あつてはならないことこのランクの上位に位置づけられている、声がかすれるほど、という形容詞つきである。

IQなんてどれだけあつたとしても、大切な人の笑顔一つ守れなくて、名探偵との攻防と低俗なコントのような事態と、あまつさえ彼女に良く似た少女のことで動揺している間、ずっと泣いていたという可能性を思いつけもしなかったら意味なんてない。勿論普段は仕事中に彼女のことを意識からあえて追いやっている。しかし今回に限っては例外的に彼女の『幼馴染』としてそうでありたかった。はあともう一つ溜息をついたとき、死んでいたはずの機械が急にぶるぶると震えた。我に返って携帯を開くとメールが一通。

それは、今さっき怒らせた、今一番会いたい人からの伝言

『明日、トロピカルランドに9時！ 全部快斗のおごりだからね
っ！』

彼がその文面をみて思わず破顔したことは一生誰にも言えないだ

ろう。彼女の優しさに完全に甘えきつていることにも、彼女の砂糖のかけらひとつで後悔がすっかりと消えている自分自身にも今は目をつぶり、素直にこの幸せに浸ろうとして。

ふと思いついた。

「っ……どうすりゃいいんだよ……」

根本的な問題が全く解決していない。いや、余計に大きくなった。

(重症だなオレも……)

本日何度目かになる溜息をついたが、こんな木の上でいつまでも過去の自分を嘆いていても事態は改善しないし仕方がない。もともと楽観主義の快斗なのだ。とりあえず一刻も早く帰りたい。悩むことは新幹線でいくらでも出来る。今ここでするべきではない。

今から発てば家にたどり着くのは確実に深夜を回るだろう。しかしなんとしても今日中に東京にいないてはならないのだ。そしてそれが自分に与えられた罰だと快斗は正しく認識していた。裏を返せばその疲労と明日の予定という殺人的スケジュールと少しばかりの金銭負担で許してくれると幼馴染はそう言うのだ。たとえそれが天使の声なのか悪魔の声なのかまでは彼には判別できなかったとしても何より大切な幼馴染のものである。

きよろりと周りを見渡せば、大阪駅に電車が流れ込んでくるのが見えた。交通の便は現代のニーズに合わせ既に回復を遂げつつあるらしい。現代社会にひとまず感謝して木を降りようとして、漸く気がついた。

「……まずは本来いるべき場所に帰るとしますか」

そこから全ては始まるだろう。どんな風に物事が転がるにしても、……転がすにしても。

自然にもれた言葉にキッドは苦笑気味に口角を上げると、マントを翻してそのきらびやかな夜の舞台を漸く降りる。

「よっ……とっ」

相応の格好に戻った快斗は、猫のように大木を滑り降りるとその

まま駆け出し、あっという間に夜の街に溶け込んでいった。

17歳の少年の苦悩の一日は終わったのか始まったばかりなのか。その答えは夜空に浮ぶ月も知らない。

ただ今は一刻も早く、彼女の元へ――

その想いだけが彼を動かしていた

ゼロまでの距離 大阪（快斗ノキッド）（後書き）

絶対あれ手痛いはずですよ。ねっ？ ……という疑問からここまで
発展しました。

ゼロまでの距離 東都（青子）

死んじゃうわけないってちゃんと分かってる。

それはなぜか青子の中に確信としてあった。快斗のいない世界なんて想像することのほうが難しいくらいなのだ。

そう思うのに、ずっと目はテレビのニュースを見つめ続けていて、体中の震えはどうしても止まらなくて、夕飯も作ることが出来ずにソファーにしがみ付いていた。おなかなんて全く空かない。

快斗のいる大阪。お父さんの居る大阪

……キッドの予告した大阪

赤いシャムネコのハイジャックしたベル・ツリーI世号の到着する大阪。

そして……

強力な感染力のあるウイルスが、ばら撒かれると予告された、大阪

そこに彼女の幼馴染は、キッドファンと飛行船好き（これは今回初めて聞いたものだが）を自認するだけあって、数日前に行くという情報のみで一人でさっさと行ってしまった。勿論その場（キッドが宝石をねらう飛行船が着陸する鈴木財閥の建物）に自分が行っても大勢のキッドコールの中で、大きな赤い×印をキッドの嫌みつたらしいシルクハットの上にかぶせた画用紙を掲げている場違いな人間にしかならないということは理解している。それでも、大阪に連れて行ってほしかった。もっというなら一緒にいきたかった。せつかくの夏休みなのだ。

しかし、今になってみて思えば、一緒に行かなくて良かったと薄情なことを思う自分がある。

その一方で快斗のことが心配で心配で気が狂いそうだった。頭の

中がおかしくなるんじゃないかというぐらいに。

ニユースを聞いたとき実の父親よりも、大阪の一般市民の皆様よりも、一番に浮んだのは、その軽すぎるフットワークに腹を立てて、さびしくて電話で昼から散々愚痴ったはずの、軽率で、危なっかしくて、でも自信満々で、青子をいつも笑顔にしてくれる、幼馴染だった。

携帯という手段があると思い出したのは動揺が起こってからかなり経ってからのこと。それも青子が自分で思い出したのではなく、甲高い音が突然響いたからだ。意識を飛ばしていたせいで、電話に出るのが少し遅れた。

無自覚に震える手で取った受話器に口が覚えている台詞をささやくと、そこからは壮年とも中年とも言いがたい、いうなれば父親に良く似た年の威厳を含んだ声が流れてきた。

『青子くんかね？』

「は、はい……そうです、けど」

『良かった。私は目暮というものだ。確認するが君の父親は中森銀三だね』

その名前なら青子にも聞き覚えがあった。東京で殺人事件と云えば、その名前が出てくるのだと、前に父が忌々しそうにこぼしていたからだ。

「はい……あの、父に何か……まさかキッドが」

しかし、その刑事であることが最悪の事態を考えて思わず上ずった彼女の声に、年を重ねたものにしか出せない穏やかで聞くものを安心させる柔らかな響きが重なった。

『いや、君が危惧することはなにもない。安心したまえ。ただ、一人で彼の帰りを待つ君がこの事態を心配をしているのではないかと彼の同僚が言うものでね、信頼の置ける人物としてわしに白羽の矢が立ったんだよ。責任はワシが持つ』

彼の声はどこまでも穏やかで、青子は自分が今までとめるでもなく流していた涙を袖口でぐっと拭った。それだけのことが出来たの

は、自分への叱責と、父の大きな思いやりと、そして何よりも、目暮警部への感謝だった。

「だい、じょうぶです。ご心配、おかけしました」

「そうか……まあ君には、とてもしつかりした幼馴染がついていると聞いているから大丈夫だろう」

「……かい……と……」

その言葉に感化され受話器の向こうに誰が居るのかも意識の外に追いやられて、ただ求める人の名前を望むままに口にしていた。

会いたい

会いたいよ……

遠い遠い大阪で

何をしているの？

『ああ……キッドならまだ捕まったという連絡はない。だが、心苦しいだろうが、今回はちょっと無理かもしれん。しかし中森は全力を尽くして彼の逮捕を』

「う……うっ」

『どうした！ 青子くんっ、青子くん！！』

目暮警部の聞き間違いが、遠慮なくあらぬ方向に彼女の心理状態を持っていつてしまった。しかし、絶対に彼に非はない。あるのはこの弱い心を持った自分と、そして八つ当たり気味に言うならば、妙に似すぎた名前を持った彼のせいだ。

青子は暫く泣き続け、そして目暮警部は彼女が泣き止むのを注意深く待っていた。

警部には娘が居ない。同僚の刑事は無論簡単には泣いたりしない。耳だけのその察しには相当の労力を要したはずだ。しかし目暮という警部は、決してそんなことを悟らせない。そしてそれを特殊なことでだという風にも感じていない。それは両方の意味でだ。

もしもこれが他の刑事だった場合、青子はこうも長いこと、通話

時間という一番現実的な概念すらも飛び越えて、感情を吐露することとは不可能だったはずだ。

『大丈夫かね、青子くん』

落ち着いてきたと同時に、受話器からの問いかけに、青子はほんの少しほほ笑む余裕さえ出てきていた。

「はい……大丈夫、です」

『何があったのか、よければ教えてくれるか？ ワシが個人的に気になるだけだが……』

やわらかい声に絆されて、青子は顔も見ることがないその刑事に、自然と答えていた。

「……幼馴染が、キッドを、見ろって大阪に居るんです。青子、もしも快斗になにかあったらって思うと、不安で、怖く、て……」

『……』
今度は目暮も、カイトが彼女の幼馴染の名前であることを正確に理解したらしい。暫く黙っていたが、やがて受話器から重々しい声が聞こえた。

『……大丈夫だ。我々警察が威信にかけて、被害が出るのをなんとしても食い止める』

その声は、勿論彼一人のものだと青子にはちゃんと分かっていたけれど、その後ろに、何千人と居る大勢の警部の声も同時に聞こえた気がした。

「ありがとうございます」

『大丈夫だ。君の幼馴染は今日の夜にはもう君の元に帰っているだろう。遅くてもきつと明日には。それはワシが命を掛けて保障するよ』

「……はい」

『それではな、青子くん。話せてよかった。また中森に用事があったて警視庁に来るときには声を掛けてほしい。お茶ぐらい奢ろう、もちろん君の幼馴染の少年も一緒にな』

「……………はい」

最後に簡単な挨拶をして電話は切れた。

耳に残る通話終了の音を聞きながら、青子にはようやく今の電話の相手の話が現実という実感がわいてきた。警部は確かに彼は大丈夫だといった。勿論それは目暮に言われるまでもなく絶対に事実だ。何度も言うが、自分には決して彼が居なくなる事など想像できない。あまりにも一緒に居過ぎただけではない。それはもう、一種の予言とでも言うべきものだ。そうでなくてはならないという。

けれど依然として消えないこの不安。いくら予言があるとしても、それが100%であるとは限らないから。そしてこの体は、胸は、その明らかに割合としては少ない方のパーセンテージに、これ以上もなく動揺している。

だったら、と青子の目は自然とそこへ向かう。何も無い朝に、ただ軽い暇つぶしとほんの少しの怒りで恵子と長電話をしていたせいで充電をしていた、その携帯電話に。

(快斗……………声を聞かせて)

こうして午後5時。青子の本当の意味での戦いが始まった。だんだんと大きくなっていくパーセンテージとの戦いが。

もうこれでコールは20回目を軽く超える。日もとっぷりと暮れてしまった。つい先ほど父から電話が掛かってきて、無事を確認しウイルス感染の可能性は消えた。

それは勿論嬉しかったのだが言い換えればその間は否応なく中断せざるを得なかったということだ。それ以外の間には10分おきに

掛け続けていたが、結局父との電話を惜しんで掛けても事態は同じだっただろう。しかしあせりは倍増する。

『おかけになった電話は……』という電車やバスの音よりはずっとずっと心臓に良いはずのよどみない肉声を聞いても、そんな音では何の慰めにもならない。心情は急勾配の坂を転がり落ちるように止めようもなくいつそ急降下しているといつてよかった。

はっきり言えば彼の大阪市民の皆様の安全は既に確保されている。だからもう声を聞く必要は厳密に言えない。けれどここまで高ぶってしまった気持ちを抑えるというのは少々無理があった。そして、一向に電話に出ないことに対して、何が何でも一言声を聴いた上で小言を言いたいという風に本来の目的が若干擦り替わってもいた。

恐らくは、23回目のトライ。長すぎるプルルルに諦めて通話ボタンを切るうとしたとき、そこに初めてその電子音以外の音が響いた。呼び出し音よりも数倍そっけないその音は、しかし彼女にはなによりも暖かい音に聞こえていた。

『……もしもし?』

一呼吸置いて放たれたそれは紛れもなく、ずっとずっとずっと聞きたかった幼馴染の声だった。少し不機嫌ではあるけれど、そして疲れてはいるけれど、死にそうな声ではないことを判断するには十分なもの。その言葉一つで漸くあのパーセンテージがぐっと下がる。「快斗!!! もうっやっつとつながった! 今何処に居るのよ!!!」

しかし、あまりにも待ち望みすぎた彼の声に咄嗟には声の大きさの加減が出来なかった。

安堵の声は、リビング一杯に響き渡った。大きすぎる声に自分で自分の耳を押さえてしまう。ずっと電話と無言の格闘を繰り返し、溜息ばかりついてきたのだ。調整が利かなかった声は、自分のものなのにやけに不自然に聞こえた。そして電話の向こうの相手も、同じように思ったらしい。不思議そうに問いかけてきた。

『あ……おこ?』

「他に誰が居るのよ!? 快斗は全然電話に出ないし、何処にいて何してるのかも全然教えてくれないし!!」

その声にますます感情のコントロールが出来なくなっただけで叫んだら、何故か目が潤んできた。流れっぱなしのテレビのニュースの音が遠のいていく。全身が耳になってしまったように快斗の声をただ待っている。自分が何を言っているのかも、それが支離滅裂なのも分かっていただけとそれを完全に棚に上げて。

「あーっ? オレは今日、鈴木財閥のベル・ツリーエ世号を見に行くって言っただけだろうが! キッドの予告もついで見えてくるって」

電話なのだから言うことを四角四面に取るのは仕方がないが、苛立ちを隠しもしない幼馴染に、青子の心の平穏は理不尽にも急激に怒りに変わっていった。それはたまりにたまり、思いつめていた気持ちを抑えられなくなるくらいには彼女の神経を逆撫でたのだ。

「知ってたよ! けどね、今日大阪は大変だったんじゃないの!」

「……あーっ……そうだな」

彼が思考分空けたその間のせいで今度こそ青子のネジは完全に振り切れてしまった。

「そうだなって何よ! 青子とつてもとつてもとつても心配だったんだから。普段は東京に居るはずの快斗がキッドの予告を見に行つたせいでもしも感染してたらって思ったら気が気じゃなかった。それにもし快斗が死んでたら青子たち一生会えなくなっちゃってたんだよ!!! 分かっているの!!!」

はあはあと呼吸をしている間、快斗は何も言わなかった。青子の息が正常に戻る頃に、漸く静かに呟いた。

「ああ……分かってるよ」

しかし、その声のトーンが普段よりも随分低かろうがこれで青子が納得できるはずがない。普段から言い続けているありきたりな攻防戦とはまったく別の次元の話なのだ。

「ほんとに？　ほんとに分かってるの快斗？　青子だけじゃないんだよ！　恵子や紅子ちゃんや、白馬君にも会えなくなっちゃうんだよ！　勿論快斗のおば様にもお父さんにも！！」

怒鳴ればまた息が上がる。受話器を置いて、今にも泣き出してしまいたかった。実際に目が潤んでくる。あれだけ泣いたのに、昼以降水分も取っていないのに、これ以上まだ水分が体から出るなんて本当に信じられない。それでも体はそれを不可能ではないというのだ。

『分かってる……分かってるよ……んなこと言われなくなつて……だから落ち着け』

やがて受話器からささやくように零れたのは、聞いたことが本当に数回しかない、快斗の真剣な声。その声にまるで嘘のようにしほむように怒りが消えて、青子は小さく問いかけていた。

「……ほんとに感染の可能性、ないの？」

『ああ……なんにしるオレは一介の見物人だし……飛行船に乗った奴等なら可能性としてはあるかもしれないけど……警察は違うって発表してんだからそうなんだろ……一般市民が感染する可能性が1%でも残ってるなら、飛行船は着地したりしねーよ』

論理的な彼の説明。納得するには十分な要素。とても安心する、テノール。

気がつけば涙はもう止まっていた。

「……うん……そ、だね」

『とにかく、電車復旧したらそつちに帰るから。警部はまだなんだろう？』

「うん……あんな事件も起こっちゃったし、今日は泊まりで事情聴取だつてさつき連絡があつた」

ほんの少し、声がいつもの自分に戻っている気がする。まだ完全に復帰してはいないけれど少なくとも電話口で叫ぶことはなくなっていた。

『おいおい……その時に確かめなかったのかよ……大阪の状況』
溜息が聞こえた瞬間、穏やかに流れ始めていた彼女の中の時が停止した。聞こえてきたのはまちがいにいくつも快斗の声。そう『いつも』の、自分をからかうような、馬鹿にするような、呆れたような幼馴染のそれ。

しぼんだ怒りがより大きく膨らむのに時間は1秒も要らなかった。大きく息を吸い込むと受話器の向こうにたたきつける勢いで叫んだ。「バ快斗！ もう知らない！ もう絶対絶対心配なんかしてあげないから！！ 大っ嫌い！！」

リビングがわーんというくらいに大きな音。しかしそれでも足りなかった。

今日一日で何度自分の心臓が、どれだけ大きく脈打ったか、どれだけ流れ続けるニュースに耳を傾けていたか。たとえ警告が解除されたと知っても、つながらない電話に不安は増えるばかりで。父の言葉を覚えているのも奇跡だというくらいに、必死に彼のことだけを、何よりも大きく彼のことだけを考え続けていたのに。

青子はぶっちんと電話を切ると、そのままソファに放り投げた。ついでに体もそこへ投げ出す。

もう何もかもが馬鹿らしくてどうしようもなかった。けれど、会話がなくなると落ちていて頭が冷えてくると、身勝手な気持ちは勝手に前へと進み始める。いや、原点に戻るのだろうか。

何よりも、彼の切る間際の、あの言葉ともいえないが確実に何かを伝えようとしていた声が、耳から離れない

『おっおいつ』

伊達に長い付き合いをしているわけじゃない。あのままいけばかなりの確率で彼は言っていたはずだ。それは100にはわずか1満たない程度の、確信とも呼びかえられるもの。

謝ろうと……していた？ あの快斗が。自信満々で、いつでも自

分が正しいと豪語してやまない彼が。

けれどそれよりも

『落ち着け』

青子に向かってそう、言ってくれた快斗。周りの人は彼のことを時々どうしようもないくらい気障なのだというけれど、青子には絶対に見せることはなく、真面目さときたらかけらも見せてくれない彼の、真摯な言葉。

「心配……してくれただよね……青子のこと」

彼を知っているのなら、あの軽口が彼の安堵の印だったと考えるのにそう難しいキーワードはいらないのだ。特に一番側に居る彼女にとっては。そう思えばいっそ驚くようなスピードで青子の中にある願望は、もっともっと大きくなっていく。

会いたい……できるなら今すぐに

大阪は遠いけど、すぐ近くだ。新幹線でたったの2時間30分。だから会える。今すぐは無理でも明日になれば確実に。明日は快斗と居たい。快斗のマジックが見たい。快斗の軽口と、呆れたような声が聞きたい。そして名前を呼ぶ声が、聞きたい。

『あ……おこ?』

あんな、驚いたような声じゃなく、いつでも自分の側に居る何気ない日常の一駒として。自分達が居ることが当たり前の中で。それが当たり前なんだとちゃんと分かるように。

ふとテレビから流れたファンファーレに驚いて、青子の体はぴよんと跳ねた。流れてそのまま目を向ける。それは小学生でもいける

ほど近場の遊園地のCM。現在はキャンペーン中なのか学生割引があるらしい。

青子は一つ頷くと携帯を開き親指をせわしなく動かし始めた。

『明日、トロピカルランドに10時！ 全部快斗のおごりだからねっ！！』

本当のところ入場料を払ってもらって小さなお土産でも買ってもらえばそれで十分だった。それでも文体が多少なりとも怒りモードになってしまふのは、彼女の意地っ張りさ故だ。だってもう彼女はかけらも怒ってなどいないのだから。逆に不思議なくらいに、穏やかな気分だった。

送信ボタンを押そうとしてふと思いとどまる。時計を見れば、午後の9時を少し回ったところだ。

(あと13時間後……)

彼女は一瞬の躊躇の後でその10を消し、1つ位を落とした。

(早く会いたいなあ……)

12時間後の期待に胸を膨らませ、今度こそ送信ボタンを押した顔はとても晴れ晴れとしていた。

急に自分が何も食べていないことを思い出した。空腹であることにも気がつく。もう遅いから簡単なものを、と彼女は手早く冷蔵庫を開け、野菜を取り出すと刻みだした。

テレビでは特集のためにずっとやっていなかった天気予報が今更に流れている。どうやら明日は晴天になるそうだ。

快斗と青子

二人の名前にふさわしい雲ひとつない空に。そう考えるとどうしようもなく、また笑みがこぼれてくる青子なのだった。

お弁当持って行こう

快斗が好きなもの沢山持って行って

二人で一緒に食べよう

鼻歌を歌う青子の頭の中には明日必ず来るであろう気まぐれな、
ついでに少しだけ眠そうな彼の顔が、映像にしては鮮明すぎるくら
いに見えていた。

ちゃんと謝ってね。

そしたら勿論『良いよ』って言って青子も謝るから。

ゼロまでの距離 東都（青子）（後書き）

裏事情込みで、ちょっぴり長めでした。

ココロの距離 翌日（前編）

「快斗ー！お待たせ！！」

「まったく遅せーんだよっ」

そう言っつて不機嫌そうに眉をしかめた彼は、青子の予想と寸分たがわない、いつもの面倒くさそうな彼だった。

「ごめんね、ちょっと準備に手間取っちゃって」

午前9時15分。青子が巨大なゲートの前で誠心誠意込めて体を折り曲げばしんと手を合わせる。そんな彼女の前で幼馴染は大あくびをしながら呆れ顔だ。

「どーせアホ子のことだから、寝坊でもしたんだろ。まったく人を誘つといてよー」

空を見上げ、まるで全部分かりつていてもいいかげな口調だ。
「ち、ちがっそんなんじゃないんだから！」

慌てて反論した青子に快斗は顔を近づけて意地悪く笑う。

「へーだつたら何をしてたんだ？」

「そ、それは……」

問い詰められて言葉に詰まる。これが自分のある意味ではわがままで言い出したことだというのは重々承知の上だから、青子はあまり強く言えない。それでも、いつもと変わらず反省の色も見せずに『たくオメーはよー』などと言われているは、そんな枷も消えてしまう。

彼にしたら、遅刻であいこだとでも言いたいんだらうけれど、あの心配量はこの15分の遅刻でチャラに出来るものではない。大体この遅刻だつて……いやそれはまだ言えない。

悔しさに青子は結局快斗を睨みつけた。

「な、なによっ元はといえば快斗が悪いんでしょう！！」

ずるいと分かりつつ捨て台詞をはいて、目を吊り上げながら快斗

を置き去りにしてずんずん歩いていく。にぎりしめた拳が彼女の怒りを物語っていた。

「……お、おいっ青子っ」

さすがにやり過ぎだと分かったのか、後ろから慌てたように追いかける快斗の声が聞こえたが青子は止まれなかった。分かっている、こんな一番『可愛くない』の代名詞だということぐらい。謝ってほしいと確かに思っていたけれど、快斗に謝らなければならないのは青子だって同じなのに。

それに……ちゃんと来てくれた。それだけで嬉しいと思う自分は確かにいたのに。

そんな風に上の空でいたからだと思う。入場ゲート前というのは本当に込み合うものなのだ。自分の意図した方向に歩けないこともしばしば。

青子は、目の前で急に倒れてきた人影に反応するのが一瞬遅れ、よけることが出来ずに足がもつれた。

「きゃっ」

「わああっ」

どしんっ

青子は大きな音を立ててしりもちをついてしまった。腰にびーんと衝撃が走りすぐには立ち上がれない。

「い、たたたた……」

「……大丈夫ですか？」

青子に問いかけてきたおそらくぶつかつた相手はとても優しそうな人で、心配そうに彼女を見てくる。快斗とは大違いだなと思つた。快斗なら、きつとまた呆れながら青子を苛立たせることを何か言っただ。

「……あ、はいっ大丈夫です！」

言いながら何とか自力で立ち上がるうとすると、彼女のように完全にしりもちをついたわけではなかった青年は、ごく自然な動作で青子に手を差し出していた。

「あ……ありがとう……」

ほんの少し頬を染めながら、その手を握ろうとしたとき

「青子っ何やってんだよっ」

少し怒ったような幼馴染の声が後ろから響いた。

快斗は青子が去ってからやはり後悔に襲われていた。

青子が怒るのも全く無理はない。快斗はその背中を見失わないように追いかけながらはあと溜息をついた。しかし、入場ゲートでは彼女によく似た背格好の人たちが沢山居て、服装と後姿で十分に分かるかと自負している快斗もさすがに混乱した。

「おいおいマジかよ……青子おっ」

冷や汗が頬を伝い、声を限りに叫んだ。しかし、どれだけ通る声を出そうとも場所が場所だ。話し声にまぎれて全く声は届かない。

勘弁してほしい。待ち合わせて5分ではくれたなんてそんな馬鹿な話あって良いはずがない。あれだけ必死に帰ってきて、謝るという決意と共に、楽しみにしていた今日なのに……。

急に辺りがざわめいた。

どうやら近くで誰かが転んだらしい。その騒動でわずかに道が開けたので、これ幸いと通ろうとして、ちらりと見えたその騒動の中心人物に彼は心の底から脱力した。

「青子……オメーなあ」

よくもまあそんな恥ずかしい格好で、しりもちなんてついてるな。すぐにそんな悪態が喉を競りあがってきたが、この状態ではそう

も言っていない。なんといつても青子はスカートで、ギャラリ
ーは彼女を円形に取り巻いている。彼等の状態を見るところからし
て非常にやばい。普段から散々からかっているのが功を奏したのか、
一応女としての常識ぐらいいは身につけてきているから尤も最悪な事
態はまぬがれたようだ。第一既に見えているものは今更仕方ない。
としても、決してこの状況は彼の基準でなくても長くさらしてい
いものではなかった。

快斗は走り出した。だがそれが危うく彼の足までもつれさせて、
こけそうにさせることになった。

(青子に手え伸ばすんじゃねー！ その柔男！)

快斗にすれば好青年もナンパ男も青子に触れようとする奴は全員
同じ狼に見えるのだ。そこまで彼女が大事ならば怒らせなければい
いのだが、そこはまた別問題であるらしい。

「青子つなにやっつてんだオメーはっ！」

結局独占欲の塊と化した快斗が自分の状態に気がついたのは、彼
等を見ていたギャラリィから無理矢理に抜け出して怒鳴りながら、
男に背を向けるように青子に向き合ってからだった。

「か、快斗？」

彼の登場に驚いてきよとんと自分を見つめる幼馴染は、全くこの
状況が分かっているいらしく、彼が何のために、いや何を恐れて出
てきたのかも全く分かっているさそうだった。そしてその点に限っ
て言えば当然で、快斗は行き場のない思いに恨めしげに空を見上げ
ると青年の前に出されていた青子の手を掴んだ。

「っほらいくぞっ」

少々強めに引っ張って立たせると、男のほうを見もせずに歩き、
いや走り出した。

「い、痛いっ痛いっば快斗ー！」

青子のそんな悲痛な声も聞けないまま。

「……」
そこにはナンパ男でもなんでもなくただ単純に彼女を助けようとしただけの青年と、最期までこの事態を見ていた十数人の見物人が無言で残されていた。

「痛いよ快斗！ 青子尻もちついちゃったんだからちよつとは考えてよ！」

「足は痛くねーだろ」

「それはそうだけど！！」

「アホ子っ早くチケット買わねーといつまで経っても入れねーだろっ」

「快斗のバカア」

大声で怒鳴りあう二人の喧嘩は、チケットの販売所に並ぶ列の間延々と続いていたが、それでも自分達の番になると、示し合わせたようにぴたりと中断された。

「な、何になさいます？」

間近で見ていただけに怖々と聞くお姉さんに向かって。

「……高校生2枚」

無然とした表情のまま、しかしはつきり答えた快斗に、彼女はあつげに取られ二人が去った後で苦笑を漏らしたとかももらしていないとか。

「いい加減怒るのやめてよ！」

「怒ってねえっつーの！」

「何よ！ その言い方が既に怒ってるじゃないっ」

喧嘩は未だ続いている。ぐきぎぎぎとお互い睨み合い一歩も引かない。

ゲートを潜り抜けた直後にそんなことをされると非常に非常に迷惑なのだが、この二人は気がついていない様子もない。犬か猫かと思えるほど、言葉に意味のない陳腐な争いを続けていた。

「あーもういいっ青子帰る。快斗なんかと来るんじゃないっ」

結局、青子がぐるりと背を向けたことで、喧嘩は収束に向かった。お互いに相当な意地の張り合いだったので、もう最初のことなどどうでも良くなってしまうていたようだ。快斗もそんな彼女を止めることが出来なかった。どっちが悪いのか頭ではちゃんと分かっている、今更引くに引けなかったのだ。それでも今このまま終わってしまうのはとても嫌だというのは、彼の紛れもない本心だった。

頭をがしがしと掻くと走りよって彼女の手を取り、やや強引に引っ張る。

「せっかく入ったんだから行くぞっ」

「……なっちよっ……だから引っ張らないでっばっ」

聞く耳持たずに歩いていく快斗。こうして入り口ゲート付近の壮絶な見世物は幕を下ろした。それを耳に入れざるを得なかった人々は、程度の差はあれど溜息と呆れを隠しきれていなかったらしい。

しかしこれで彼女の機嫌が直ったわけではないのだ。

ぶっすー

隣に座る青子の顔はさっきからそう表現するのが一番的確な表情である。言い換えれば全く楽しそうではなかった。とはいっても快斗自身もそんな青子に掛ける言葉が見つからないので、不機嫌に黙りこくっているということになる。これを渡ればメルヘンの国に入ることのできる橋の手前のベンチに座り込んだ快斗は、遊園地には恐ろしく似つかわしくない状況を嘆き天を仰ぎ見た。雲ひとつない

空だが、気持ちいいとは微塵も思えない。

この休憩は苛立った自分が強引に座り込んだからこそだが、その理由としては青子の体を気遣ったものだった。勿論彼女に届いているかといえは皆無に近い可能性しか見出せないにしてもだ。

そんな見えない努力ばかり重ねて肝心な一言が言えない自分に、胸のうちでひそかに嘆息する。

いつもの喧嘩なら、軽い言い合いで済むほどに同じ時を歩んできた二人だが、今回はまちががなく快斗とタイミングが悪かった。青子の心配を昨日あれだけ聞いておいてまだ謝れていない。青子が遅刻してきた時点でボタンを掛け違えた様にそのタイミングがつかめなくなっていた。

言葉に出来ない一方で独占欲だけ丸出しにすれば、それは青子だって戸惑い怒るだろう。

けれどももうこんな空気には一秒たりとも耐え切れそうにない。人目がないのなら大声で叫びたいほどだった。かなり精神的に参っている快斗である。

ちなみについさっきまで注目的になりつつ喧嘩していたことは、彼の意識にはない。

(どうすっかなーっ)

だが、自分が謝れなければ、このままずっと青子は不機嫌だ。意地を張っているのは明らかに快斗。けれど面と向かって謝るなんてそれは彼の性格上非常に難しい。だったら取る選択はひとつ。芸は身を助けるとはよく言ったもので

「One Two Three！」

無理に明るい声を絞り出して、指を鳴らすと途端に空中に溢れる色とりどりの紙ふぶきと花びら達。

快斗が快斗であるために絶対に持つてくる必需品たちが、これでもかとはかりに存在を主張して派手に舞い踊る。

「わあっ！」

俯いていた青子が素早く立ち上がり、突然振ってきた思いも寄らないものに驚いて真上を見上げて歓声を上げた。ついでに通行していた人々もだ。その無邪気な姿に思わず苦笑がもれる。

「すっごいつすごーい快斗」

「まだまだだぜ」

振り返ってきらきらした瞳に見つめられ、先ほどの気持ちなど嘘のように春風が胸の中に吹いて得意になった快斗は、さらに何度かばちばちんと指を鳴らす。

そのたびに様々なものが空に現れる。到底彼の体には収まらないはずのぬいぐるみや、新体操のようなカラフルなりボン。そして勿論彼の相棒である鳩も……。

「うわあっ」

雲ひとつない空から次々にはじき出されるモノを見上げては一つ一つ歓声を上げる青子。仕掛けは至極単純だが自分の腕で彼女の目には何も無い空間からモノが飛び出してくるようになっているはずだ。一生懸命空を見上げる青子の楽しそうな笑顔。これが何よりも快斗は好きで、同時に視線を根こそぎ持つていかれる。

不意に笑みが零れた。いつだってこれが自分の原点。エンターテインナーとしての自分を生み出した彼女に向ける笑みはこの上もなく優しいものだった。

やがてその場には当然のようにギャラリイが出来、一舞台終わつた快斗は優雅に一礼をする。

青子は、すぐにでも本当にマジシャンになれそうな自慢の幼馴染を観客達が去つてからもぼつと眺めていた。

彼が最後の観客に飴玉をプレゼントし終えて彼女のほうを向いたとき、青子は勢いよくその腕に飛びついていた。

「すごいほんとにすごいよ快斗！ つあ……」

ひとしきり言った後で漸く思い出して罰が悪そうに、怒った顔を作るうとして、結局それが出来ずに眉をひそめる彼女に、快斗はぽんと花を差し出しながら一言。

「機嫌……直ったか？」

「快斗……悪いと思ってるの？」

駄目押しを迫る青子の頭上に、ひゅうるるる……ぽて。可愛らしい音を立てて落下した小さな小箱。それは跳ね返ってベンチのすぐ側に落ちた。

「った……な、何これ？ ……快斗？」

立ち上がりそれを拾った青子が、ゆつくりと振り返る。明らかに催し物として出てきたさつきまでのものとは違う大坂の名物おたふくの包装紙に包まれた、見た目地味な箱。振ってみればかさこそと音がする。

「……気に入るかわかんねーけど」

前を見たままで呟くように言う快斗。その顔が若干赤かった。

「快斗……」

言葉は確かに彼の口からは出てこない。態度だっていつもと同じで調子がいい。でも、自分が悪いということ、恐らく青子が責める以上に感じている事は明白だ。これが自分と一緒に意地っ張りな幼馴染の精一杯だと青子は正しく理解した。

小さな溜息をついた後で開けたそこには色とりどりの形の凝ったキャンディーが可愛らしく並べられていた。青子の好きそうなものを知り尽くした快斗だからこそなせるチヨイスだと一目でわかる。

嬉しさがこみ上げてきた青子は、それでも少し不機嫌さを装いながら心は完全に穏やかだった。

「はあ……もうしょうがないなあ……ま、いいや。行こつ快斗、もう青子体大丈夫だから」

竿後はにっこりと笑うと、青子は快斗の腕を取り立ち上がって歩き出した。

一方で快斗は、その笑顔と、言葉に当てられて、視線を彼女と合
わせることが出来ず、今更だが昨日の腕の感覚が蘇ってきた快斗は、
仲直り早々新たに問題を抱えることになっていた。

その後彼が暴れ回る心臓を押さえつけるのに苦勞していたのは誰
も知らない。

ココロの距離 翌日（後編）

「きゃーーっ」

快斗の隣でアトラクションの本来の目論見どおりに絶叫しながら、しかし笑顔で両腕を上げている青子。

絶叫マシンを怖がる方が少女としては可愛げがあるだろうが、彼女は昔から全くそんな様子はない。尤もそんな必要もないのだけれど。ただ、乗る前からときどきわくわくを絵に描いたように好奇心に溢れていて、しがみつく、なんていうお楽しみイベントを快斗が期待することはお門違いだった。ただ、いつもならばそれが少々物足りなかつたとしても、今に限ってはありがたい話だったのだ。

「面白かつたねー」

にこにこにこにこ……満面の笑みの楽しそうな幼馴染を勿論求めてはいた。けれどそれが綺麗過ぎて可愛くてもう直視ができない。ときどきと鳴る心臓が止まらない。

昨日のあの疑似体験が、快斗に今更苦行を強いていた。人の目関係なく動き出しそうになる右手を握りしめる。ついでに足も彼女のいる方向とは180度別の方向へ向ける。

「あ、ああ……」

言いながら歩き出す。

だから青子がそんな彼を見ていた目が、先ほどの笑顔が掻き消えたとても寂しそうな顔だったことを、快斗は知ることが出来なかつた。

「青子ー次どれ乗るんだ？」

「快斗……ちょっとお土産でも見よつか？」

5個ほどアトラクションを回った辺りで、青子が快斗の後ろから唐突に言った。

快斗は勿論この申し出に怪訝そうな顔をして青子を振り返る。

「土産？ だつてまだ昼前だし、欲しいものでもあるのか？」

「うん、やっぱりお父さんにお菓子とか買っていつてあげたいから
そう言つて快斗の手を取ると、ゆっくり歩き出す。

「青子？ 急にどうしたんだよ」

腑に落ちない快斗は、青子に問い掛けるが、青子は振り返らない。

「別に……ただちよつと疲れただけだから、休憩ががてらにね。快斗は休んでていいよ。お土産は青子が自分で買つから」

「……青子？」

いつもなら『んもうつ休む休むつて快斗はそればかりじゃない！
ちよつとは青子に付き合つてよね』ぐらい言いそうなものなのに、今の青子は明らかに元気がない。

「どーした青子？」

「なんでもないつたら！」

そういう声がもう決定的で隠し切れずに震えていた。

いくら幼馴染でも、男と女の差はこの年になればもう歴然。快斗は歩んでいた足を止めた。

「か、快斗？」

「理由言うまで、動かねーからな」

「……ほんとになんでもないつたら……」

「あーおーこー？」

「大丈夫だから、ねっ？」

振り返つた青子はいつもの青子だった。そんな風に見えた。だが、彼はそれで納得できるほど浅い関係を築いてきたつもりはない。

快斗は、俯いた彼女の手を逆に引っ張つて歩き出した。

快斗は一つのベンチに青子を降ろし、その前にかがみこんだ。

これはマジックでどうこうしていい問題じゃない。いつも人一倍賑やかな彼女に元気がない。それがどんなに大きなことか快斗は彼女以上に分かっている。それも喧嘩もしていないのに、精いっぱい楽しくしていたはずなのに、だ。

「……………青子、どーした？」

自慢のIQをフルに使ってみても、全く見当がつかなかった。

「快斗……………」

「どーした？ 言ってみろ？」

目を覗き込んで答えを促すと、青子は弾かれたようにそっぽを向く。それに少なからず胸が痛んだ。

「おい……………こつち見ろよ」

「……………なによ……………快斗がさつきからずっとやってることじゃないっ」

青子の言葉に、晴天の霹靂、といえば聞こえだけはいいが、脳天を殴られるのと、たらいが落ちてくるのと、それ以上の衝撃であるといえはむしろもう無様だ。それでも快斗はそれを甘んじて受けなければならなかった。

「快斗、青子といっても、どっか遠いとこ見てるじゃない」

呟かれた彼女の不安要素に、快斗は更に2発3発と殴られる。

青子は昔から人の気持ちや隠された行動には人一倍敏感だ。それはいつだってポーカーフェイスを信条とする彼の傍にいるせいかもしれない。

「……………」

「この前と逆だね、快斗……………」

あのキッドの予告日に二人で遊びに行ったことを言っているのだろう。青子が不自然で、気持ち悪いくらいにべつたりで、だから、快斗が意地悪をして自然に戻させた。

今回不自然になっていたのは快斗のほう。理由は違えどそれが事実。

「……………」

「……青子何かした？」

「は、はあ？ んなことあるわけ」

「……じゃあどうして？」

俯いていた顔を急に上げられ、その目が真っ直ぐに快斗を射抜く。涙の薄ら滲んだ瞳に心臓まで貫かれたかのようなその衝撃に思わず快斗は目を逸らした。

そしてそれで青子の疑いは決定的になっただけらしい。

どこかへと走り出そうとした青子の腕を間一髪で快斗が掴む。

「離してよ！ 離してったら」

「やだね……………」

「なんで、なんか勝手だよ今日の快斗。急に怒るし、楽しくないくせに青子といたがるし……………変だよ」

今にも泣きそうな声に、快斗はほとほと参ってしまった。こんな声を出させるほどに自分は青子を追い詰めたのだと思うと、どうしようもなく苦しくなる。それはたった一言で誤解としては解ける。けれどそれを言うことは彼にとって今の状況を打破する以上に勇気のいることだった。

頭を掻き毟りたい衝動を押さえ結局そっぽを向いてぶっきらぼうに告げた。

「……青子は関係ねーんだよ」

「じゃあなんで？ どうして楽しそうじゃないの？ やっぱ青子じゃ」

「だからそうじゃねえって！ 俺はお前といて迷惑なんて思ったことねーから！」

しまったと思ったが、今回ばかりは滑らせてしまったことが良かったようだ。

「……………ほんと？」

顔を上げて、ふっと安心したように表情を緩めた青子に、快斗は

またどきどきとしながらも諦めたようになんとか視線を合わせて答えた。

「ああ。だから余計な心配すんじゃないよ」

「うん……わかった。快斗を信じる」

「なんだよ、それ……」

快斗は呆然と呟くが、青子には聞こえていないようだった。と同時に快斗の腹が安堵と空腹で盛大に鳴った。

二人ともしばし固まってしまふ。

「あははっ……じゃあお昼にしようか？」

やがて沈黙を破ったのは、青子の笑い声だった。

「お、俺なんか買ってくる」

快斗は真つ赤な顔で、すぐにでも歩き出そうとする。

「待つて待つて行かなくていいの！ 実は青子ね、今日お弁当作ってきたんだ。でもちよっと手間取っちゃって、遅刻したのは実はこのせいなんだけど……」

青子は下を向いて恥かしげにそう言ったが、そのあとは本当に嬉しそうに、近くのベンチに座り鞆を下ろした。言葉を出すことも出せずに彼女を見つめ続ける快斗には気づかず、鞆から大きな弁当箱代わりのタッパを2個取り出す。ついでに水筒もだ。

「色気ねーなあ……」

「いいじゃないっこれが一番沢山入るんだから。快斗って人一倍食べるでしょ？」

タッパのフタを開けると、その品数の多さに快斗は目を見張った。これは確かに遅刻しても仕方がない量だろう。むしろあれだけの遅刻で済んだ青子の手際のよさを称えるべきだ。ひとつひとつのおかずが凝っていて、赤に緑に黄色に茶色にオレンジまであって彩りも抜群。入れ物がタッパであることなど忘れてしまふほど立派なお弁当。

しかし、彼の口は天邪鬼に掛けては筋金入りだった。

「遊園地に弁当って……営業妨害じゃねえの？」

「……じゃあ快斗は食べないのね？」

せつかく魚は入ってないのになあ……。

笑顔のままタッパーを今にも片付けそうな青子に、快斗は、とうか快斗の胃はあつさりと白旗を揚げた。副業をやっているも金銭は稼げない。アルバイトも高校生では限られるし時間も副業にとられるからそうは出来ない。正直なところ出来るなら常に寂しい財布の為に、場所料金だかなんだか知らないが、あえて数割高い金額は払いたくなかった。

「……イタダキマス」

「分かればよろしい」

にっこりと笑う青子にまた心臓を射抜かれ、青子が下を向いた瞬間に呼吸を整えていた快斗は

(俺、帰るまでちゃんとコイツと『幼馴染』でいれんのかな……)
ポーカーフェイスの裏側で至極真面目に考えていた。

「どう？ そのから揚げ？ 青子の自信作なんだよ」

「まー食えねえことねーな」

「快斗っ」

「ってことでもう一個もらっせ」

歯を見せて笑いながら口に放り込むから揚げは、実際彼の大好物であった。青子はそれを見て溜息をつく。

「ほんとひねくれてて意地悪なんだから……」

そんな彼女の一瞬怒ったような顔も長引かないと知っていれば、見るのは結構好きなのだ。口が裂けても言えないけれど。

「あーおーこ、そっちのおにぎりって」

「はいはい……」

半ば諦めたように俯いた青子を見る快斗の目は本当に優しく、それが本当に彼の態度を口だけだと伝えているけれど、下を向いている青子には伝わるわけもない。

二人の周りを歩きさる人々だけが妙に早足になる空気がそこには意図せず漂っていた。

昼ごはんの後も、二人でくたくたになるまで遊びまくった。コーヒークップでふらふらになった青子を快斗が面倒見たり、お化け屋敷に入って本当に怖がった青子を快斗がからかったり、魚の出てくるアトラクションだと二人して知らずに入って模型に泣きそうになっている快斗を青子が大笑いしながら見ていたり、青子が予定通り快斗にお土産をねだったり。

そんなこんなで終園時間まであと1時間足らずになるころ、ふたりはとあるレストランにいた。青子も今回は魚料理を注文せず、味も良かったので、二人は非常に満足しており、どうでもいいような大事な話に花を咲かせながらゆったりとした時間をすごした。その後ちょっとしたデザートを食べて店を出ると（さすがにもう余裕のない快斗は青子を拝み倒して割り勘にもらった）時間が時間なためか場所のためか、目立つのはカップルばかりになっていた。

快斗がその幸せそうな空気を別の意味でうらやましいと思いつつ見ていると、青子に肘でわき腹をつつかれた。

「快斗ー覗いちやだめよ、失礼でしょ」

「けっ誰が見るかっての」

「じーっと見てたじゃない。もうーいつくら綺麗な女性ばかりだからってスケベなんだからー。あ、なんだったらあんな風に青子も

べたべたしたげよつか？ 一応女の子だし？」

「……もしも青子さん？」

それが冗談であると分かるから、快斗は呆れたように半目で答える。青子も傷ついた様子はない。なのに、それがほんの少し寂しいだなんてわがままなことを快斗はつい思ってしまう。

不意に青子に右手を引つ張られた。

「ほら、帰ろう快斗。それとも……なんか最期に乗ってく？」

と言いながら、歩き出した方向は出口とは全く正反対の方向。快斗は今度こそ呆れかえる。

「……おめーが乗りたいもんあるんじゃないのか？」

「あ、分かった？ そう、青子ねーアレ乗りたいんだ」

悪びれもせずに彼女が指差したのは、夜の定番中の定番。そこにあるのはまぎれもなく

「かんらんしゃあ！??？」

「あれ？ 快斗嫌なの？」

意外だという風に首をかしげる青子に、快斗はなんとか平静を保つ。

「いや、ベタすぎねえ？」

「いいじゃない、ほら行こつ馬鹿となんとかは高いところが好きっていうでしょ？」

「……そりゃオメーのことか」

「何で青子なのよ！ 快斗でしょーっ」

もはやなにを言っても無駄そうだ。

こうなった青子の勢いに勝てたことは一度もない。快斗は観念して青子に半ば引きずられるように、その大車輪に向かった。

快斗の精神的苦行はまだまだ続くらしい。

「でけーなあ……」

「うん、大きいねー」

近くで見ればそれはそれは大きな観覧車。日本で何番目かは知らないが、この大きさならば、ビル何階に相当するのだろうか。快斗がそんなことを考えていると青子に腕を引っ張られる。

「快斗ーほら早くー」

「へいへい」

跳ねるようにその長い列の最後に並ぶ青子に返事をする、快斗はふつと笑って観覧車を見た。そうそれは男子高校生とは思えないほどの真剣な目で。しかしとても、楽しそうに。

観覧車から見える景色は、まさに絶景だった。遊園地が小さくなるにつれ、色とりどりの光がきらきらと輝いて、まるで宝石箱のようであり、所々に消えたり付いたりするものもあって余計に幻想的だった。さらに、その周囲の園内ほどではない穏やかな夜景が闇の中に浮かび上がり、遊園地の明るさをさらに引き立てていた。

ちなみに反対側には海が見えるがこちらは、昼専用らしい。今は単なる闇で、黒と寸分たがわない。

「きれー」

勿論青子は光の洪水の遊園地のほうを見下ろしながらさつきからずっと興奮していた。さすが自分から乗りたいと言っただけのことはある。『もと』を取るかのように全力で楽しんでいる。その喜び方は観覧車も冥利につきるといふものだろう。勿論快斗にとってもそれは同じだ。

「ねー快斗、見て見て！！ すっごく綺麗っ」

体を乗り出して小さな子どものように外を見続けている青子から

快斗の顔は見えない。

「見てるっつーの、ぎゃあぎゃあ喚くなよ……」

感情はおくびにも出さず少しげんなりとした声で快斗は応える。当然のようにそれに青子は慥然を膨らませた。

「ほんと、快斗ってデリカシーないんだから」

勿論彼女が振り返る頃には快斗は表情すらそう装う。

「お前相手じゃ、たとえ持ってたとしても、なあ」

意味ありげに向かいから口角を吊り上げて笑う快斗に、青子はますます苛立つのだ。

「何よ……そりゃ青子は、可愛くないけど……でも……でも」

急に声の張りがなくなる青子に快斗は怪訝そうな顔をする。

「青子？」

「こつやって二人で出かけるの……随分、久しぶりなのに！せつかくの夏休みなのに快斗大阪だつて一人で行っちゃうし！」

「……………」
黙ったまま、ただ見つめてくるだけの潤んだ瞳はしかし言葉以上に雄弁で、その壊滅的な破壊力に快斗は理性がはじけ飛ぶ音を聞いた。

「っ」

次の瞬間快斗は、その華奢な腕を無理矢理引つ張ると、軽く宙に浮かんでダイブしてきた青子を手加減なしにぎゅううつと抱きしめていた。

（どうせ誰も見てねーし……アホ子が意味に気がつくことなんてねーんだし……）

そんな言い訳を今更にしながら。

「かつ快つ…かい…」

一方で、さっきの冗談が形だけ現実になった今、二人の乗る観覧車の車体と同じに真っ赤になってしまふ青子。けれど快斗はそれどころではなかった。勿論腕の中の感触は理性をなくさせるものだった。

だが、記憶にあるその感覚と、当然のことながら一致しないことにある一点が急激に冷静になりつつあった。

「やっぱ……違うよなあ」

あれより何倍もやわらかくて暖かくて、この世のものとは思えないくらい抱き心地。思わずにやけてしまつのを押さえられない。

この瞬間に快斗を縛り付けるものは完全に消え去っていた。別の鎖が新たに彼に巻かれたと、気がつくのはもう少し後の話。とにかく今はこれ以上にないくらい幸せだった。

「なにっなんなの？ 違うってやっぱり青子？」

「いいや、むしろ青子は青子だなーって。馬鹿なことか、このスタイルとか？」

自分が力の限りに抱きしめているということを忘れさっているのか、状況に不釣り合いに快斗はにいと笑う。まるで悪戯好きの少年のように。そして、こんな状況だというのにそんなことを言う快斗に青子は逆に恐怖を覚えたようだった。

「な、何言ってるの！？ 快斗のスケベっほんとにどうしちゃったのよ？」

わたわたわた……体は彼の力と緊張で硬直しながらも、口調だけは本当に慌てふためいている青子に、快斗は堪えきれずに噴出す。

「お前おっもしれー。顔真っ赤だぜ」

「何よそれっ青子は真剣に」

「だーかーらーさつきも言ったろ？ 迷惑とか、つまらないなんて全然思ってないって……大体そんなことならわざわざ朝っぱらから付き合っつてねーよ」

いっそのことと、もう彼は覚悟を決めてやけ気味に言い放った。

「快斗……」

ふっと体の力が抜けた青子を確認すると、快斗はふっと笑う。

ちやうど観覧車は一番天辺に来ていた。

「いいか……見てろよ」

そう言って彼女を抱きしめたまま呪文を唱える。彼のとっておきの魔法が始まる合図を。

「Three Two One!」

指を鳴らすと同時にぼんと煙がはじけたのは、明らかにガラスで隔てているはずの空。

溢れてくるのはキラキラと輝く金色の粉。海があることも忘れられるくらいに真っ黒な闇の中に突如降り注いだ金の雨。

「わあ!」

その温度が消えたことは少し残念だった。しかし手を離れたのは自分だし、それに見とれて同じように笑う青子は腕の中にいるときよりも何倍もキラキラして見える。

青子が振り返れば特別大サーブスだと言いたげに快斗は笑っていた。上がった歓声に下を見れば、いきなり始まったマジックショーに驚いて身を乗り出す乗客たちの姿もある。快斗にとってたった一人のための奇跡は、結果的に皆を幸せにする。

青子は嬉しさから、快斗の胸の中に飛び込んだ。それはもう怖いぐらいに自然に。

「快斗、すっごーいっ」

暫く快斗は硬直して何もできなかった。しかし体の自由を取り戻すと、彼女から、彼の顔は見えていないことをいいことに、快斗はにんまりと笑うと彼女の耳元でそっとささやく。

「……自分から飛び込んでくるか？ 普通……」

「へっ?」

思わず顔を上げればそこにあるのはもう、悪戯を成功させた意地悪な幼馴染で。

「……なーんてな。青子相手じゃ無理無理」

一瞬目を瞬かせた彼の愛しい少女は、その被せた意味を理解する

や、半目で彼を睨む。

「……もう、快斗！」

「あれーなーんでそこで怒るのかなあ青子ちゃん。もしかしてなんか期待した？」

「ばっバ快斗！」

にまにまと楽しそうな快斗の体を真つ赤な顔でぼかぼかと叩く青子。観覧車はゆっくりとゆっくりと、地上に向かって降り始めていた。

青子の中に、幼馴染が離れるという危惧は既にかけらも残っていなかった。

快斗の中に、幼馴染に勝る笑顔があるという可能性はすっかり消えていた。

こんな二人は未だ喧嘩の絶えない幼馴染

ココロの距離 翌日 (後編) (後書き)

こんな感じで捏造話終了です。いかがでしたでしょうか？

ラストは、一応映画の続きということであんだけ快斗が蘭ちゃんに近づいているので、どうしても接近させたくてじゃれあわせてみました。が、いつもの快斗っぽくないかなとは思っています。許容範囲であることを願っています。

ま、とにかく……この二人書いてると幸せです。ほんとに……。まじ快好きです。

感想とか批判とかあれば、一言でもぜひよろしくお願いしまーす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8028x/>

映画『天空の難破船』 ちょっぴりその後

2011年10月28日15時20分発行